

## ■本資料のご利用にあたって(詳細は「利用条件」をご覧ください)

本資料には、著作権の制限に応じて次のようなマークを付しています。  
本資料をご利用する際には、その定めるところに従ってください。

\* : 著作権が第三者に帰属する著作物であり、利用にあたっては、この第三者より直接承諾を得る必要があります。

CC : 著作権が第三者に帰属する第三者の著作物であるが、クリエイティブ・コモンズのライセンスのもとで利用できます。

© : パブリックドメインであり、著作権の制限なく利用できます。

なし : 上記のマークが付されていない場合は、著作権が東京大学及び東京大学の教員等に帰属します。無償で、非営利かつ教育的な目的に限って、次の形で利用することを許諾します。

- I 複製及び複製物の頒布、譲渡、貸与
- II 上映
- III インターネット配信等の公衆送信
- IV 翻訳、編集、その他の変更
- V 本資料をもとに作成された二次的著作物についての I から IV

ご利用にあたっては、次のどちらかのクレジットを明記してください。

東京大学 Todai OCW 学術俯瞰講義  
Copyright 2014, 加藤陽子

The University of Tokyo / Todai OCW The Global Focus on Knowledge Lecture Series  
Copyright 2014, Yoko Kato

第11回 戦争の歴史から国家を見る「日露戦争研究の現在」

野島(加藤)陽子(文学部)

(承前)

3. 満州事変から太平洋戦争期における中国イメージ 淵源としての日清戦争

(6) まとめ

第11回分

1. 日露戦争～分析視角と研究動向

- ①慶応義塾大学東アジア研究所主催で国際会議→その成果がSteinberg et al., *The Russo-Japanese War in Global Perspective: World War Zero*, vol.1 (Brill, 2005), Wolff et al., *The Russo-Japanese War in Global Perspective: World War Zero*, vol. 2 (Brill, 2007)  
読売新聞取材班『検証 日露戦争』(中央公論新社、2005年)
- ②日露戦争研究会主催で、もう一つの国際会議→その成果が、日露戦争研究会編『日露戦争研究の新視点』(成文社、2005年)
- ③加藤陽子『戦争の論理』(勁草書房、2005年)第3章
- ④韓国への排他的支配を狙う日本、ロシアの援助のもとに自国の中立化を願う大韓帝国、満州を占領しつつ韓国の希望を支持するロシア、という三者の立場
- ⑤これまで、日本側研究者は、日清戦争を、朝鮮の「独立」を日本の力で清国に認めさせる戦争、つまり、朝鮮への日本の支配権を確立するための戦争であると理解し、その上で、日露戦争を、次なる目標、満州の開放をロシアに認めさせる戦争、つまり、満州への日本の支配権を確立するための戦争というように、日清と日露を、段階的に理解していたように思う。
- ⑥ロシアで新たに公開された新しい史料に基づいて進められたロシア専門家の研究を、日本側研究者の研究とすり合わせると、これまで以上に、日露開戦前の外交問題としての韓国問題の大きさを日本側は自覚する必要がある

2. 日露戦争前の議会、国民の雰囲気～「三国干渉、臥薪嘗胆」ではない

(1) 開戦後、1904(明治37)年2月11日の『原敬日記』(福村出版、1965年)2巻、90頁

「(前略) 我國民の多数は戦争を欲せざりしは事実なり、政府が最初七博士をして露国討伐論を唱へしめ又対露同志会などを組織せしめて頻りに強硬論を唱へしめたるは、斯くして以て露国を威圧し、因て日露協商を成立せしめんと企てたるも、意外にも開戦に至らざる行掛を生じたるものゝ如し(中略) 而して一般國民就中実業者は最も戦争を厭ふも表面に之を唱ふる勇氣なし、如此次第にて國民心ならずも戦争に馴致せしものなり」

(2) 伝記の陥穽 徳富蘇峰編述『公爵山県有朋伝』(1933年)、同『公爵桂太郎伝』(1917年)などのトーン

3. 日本史からの研究の潮流

(1) 坂野潤治『大系日本の歴史 13 近代日本の出発』(小学館、1993年)323頁。

- ①「日本国民のかなりの部分と支配層の一部は、日露戦争の直前までは、むしろ厭戦的であった」。参照、選挙結果[1903(明治36)年3月の第8回総選挙 政友会は193議席、憲政本党は91議席を獲得 376議席中の過半数を政友会だけで占める]

②1902年1月の日英同盟の同時代的受け止め方。原敬日記「地租増徴に反対すべし、又此地租を財源として海軍拡張をなさんとすの計画にも反対すべし、其訳は日英同盟の結果として暫く軍備の拡張を見合わせる事適當の処置なり」。～1902年10月29日『原敬日記』2巻、32頁。

## (2) 三谷太一郎『近代日本の戦争と政治』(岩波書店、1997年)

①元老はじめ政界上層部の間にはむしろ非戦論(少なくとも潜在的な非戦論)が少なくなかった。参照、枢密院での議論

1903(明治36)年12月28日、開戦を想定して戦費の調達のための財政上の緊急処分をもちこんだ勅令案審議は難航。

②開戦前の原敬日記「昨日来、時局の切迫露国は戦争に決せし由、風聞頻々たり、号外を発する新聞紙多し、時局の成行に関して政府秘密政略過度の弊、国民は時局の真相を知らず、又政府も最初は満洲問題に関し露国に請求せし由なるも漸次変遷して今は朝鮮に於て中立帯の広狭を争ふ位に過ぎざるものゝ如し、斯くても開戦とならば国民は無論に一致すべきも、今日の情況にては国民の多数は心に平和を望むも之を口外する者なく、元老と雖ども皆然るが如くなれば、少数の論者を除くの外は内心戦争を好まずして而して実際には戦争に日々近寄るものゝ如し」～1904(明治37)年2月5日『原敬日記』2巻、90頁。

## (3) 千葉功『旧外交の形成』(勁草書房、2008年)

①日露交渉の対立点は何か 1903年6月23日の会議で対ロシア基本方針を決定。大山参謀総長「朝鮮問題解決に関する意見書」、小村外相「対露交渉に関する件」の内容。ロシアが満州を占領している現在、韓国が危ない。韓国の保護国化をロシアに認めさせようとする。「ロシアは韓国に於ける日本の優勢なる利益を承認し」。韓国に対する助言助力の専権を持つ、出兵の権利を持つ。

②日露交渉(1903年7月～1904年2月)で議題とされた論点や、その当時の元老会議の内容の変遷を緻密に検討。1903年12月の元老会議の出席者は、伊藤博文、井上馨、松方正義、大山巖、山縣有朋の各元老。桂太郎首相、陸(寺内正毅)海(山本権兵衛)外(小村寿太郎)の各大臣。

③開戦に積極的なグループとみなされてきた山縣・桂・小村らと、消極論の代表とみなされてきた伊藤との間では、「満洲問題と韓国問題は密接不可分であるからこの二つの問題を同時にロシア側と交渉する」との立場においては相違なし

④クロバトキン陸相が手記で用いた資料「極東特別委員会に保存されていた対日交渉資料」→日本側「大阪毎日新聞」1907年1月10日～18日に記載される。これを用いて、ニコライは日本の韓国占領を容認していたが、その最終回答が届かないうちに戦争が始まった、との説。

⑤ロシア側の最終回答(1904年1月28日)がより迅速により確実に日本側に到着していれば、日露戦争は避けられたと述べる。

⑥1903年12月10日における、参謀本部における会合での児玉源太郎参謀次長の発言

「露国財政窮乏のため日露問題は多分平和的解決をみるであろうが、ただこれ戦機を両三年延期するにすぎなく、われの不利はかえって大となる。日露の戦力比は日本に不利になる。いかに対処すべきか」～谷寿夫『機密日露戦史』(原書房、1966年)41頁。

## 4. ロシア史からの研究の潮流

### (1) 和田春樹『日露戦争 起源と開戦』上・下(岩波書店、2009年、2010年)

参照、和田「日露交渉 日本からの見方」、早稲田大学ロシア研究所編刊『20世紀初頭におけるロシアの対外認識』(2012年)所収、和田「日露戦争 開戦にいたるロシアの動き」、『ロシア史研究』78巻(2006年5月)等。加納格「ロシア帝国と日露戦争への道」、『法政大学文学部紀要』53号(2006年10月)

①日露戦争におけるロシア側の動向について、日本側の古典的な説明 司馬遼太郎『坂の上の雲』第2巻(文藝春秋、1969年)

〜ウィット蔵相などは戦争の回避を願ったが、ベゾブラゾフ派は朝鮮領有をめざし冒険主義的であり、皇帝はその影響もあって侵略熱こうかされ、クロバトキン以下の軍人はロシアの勝利を疑わず、日本軍の実力を評価していなかった、といった論調。これはウィットの回想録に依拠したもの。大竹博吉監修『ウィット伯回想記 日露戦争と露西亞革命』上巻（1930年）

- ②クロバトキン陸相、戦争中から4巻本の皇帝への上奏報告、そのうちの一冊『戦争の総括』。ウィットが軍備強化に金を出さず冒険的な極東政策をとったと非難。また、クロバトキンの日記〜1903年9月、皇帝とクロバトキンがベゾブラゾフを窓から放り出すべきだと意見が一致したと書く。ロシアには主戦派はいなかった、戦争をやる気はなかったという見方生まれる。
- ③和田の見るところ、最も優れた開戦過程の研究は、ロシア参謀本部の10巻本の公式戦史の第一巻第一章を担当したシマンスキー少将が業務用に作成した調書（1910年）
- ④強硬派と目されてきたベゾブラゾフの、日露戦争直前の動き〜1904年1月10日（12月28日）、露日同盟意見書を作成。ロシアは満州を併合せず、日本も朝鮮を独立国のままとし、ロシアと日本は国策開発会社を作り、それぞれ満州と朝鮮の天然資源を開発するという提案。ニコライ二世文書中にこの史料ある。「天皇とツァーリの直接連絡で同盟案を進める」。しかし、皇帝はベゾブラゾフの提案に応じない。栗野慎一郎駐露公使はこの提案に興味を持ち、小村外相に長文電報を送る。1月15日日本着。しかし、ラムズドルフ外相→栗野公使にベゾブラゾフは「一個の狂人にして」「相手とするも更に益なきこと」と語る。
- ⑤ラムズドルフ外相は、2月3日、対日回答案を旅順のアレクセーエフ極東太守に打電。皇帝の意思はなお、朝鮮の中立地帯条項を秘密条項として保持したい。
- ⑥朝鮮問題が最大の対立点。ロシアは日本に対して、朝鮮の戦略的不使用要求と中立地帯の設定を求め続ける。北緯39度線以北に中立地帯の設定について、秘密条項でもよいから担保したい。しかし、戦略的不使用の条項はなくなる。
- ⑦韓国皇帝高宗、1903年8月15日のロシア皇帝宛密書。戦争になれば、韓国はロシアに味方をする、その上で韓国の戦時中立を認めるように日露両国に交渉するとの意向。ロシア外務省文書。ロシアは好意的に反応。

(2) I. V. ルコヤノフ「日露戦争に至る最後の日露交渉」、早稲田大学ロシア研究所編刊『20世紀初頭におけるロシアの対外認識』（2012年）所収

参照、ルコヤノフ イーゴリ・B「ベゾブラゾフ派 ロシアの日露戦争への道」、日露戦争研究会編「日露戦争研究の新視点」（成文社、2005年）、

- ①ニコライ2世からの信頼を1903年には確立し、ロシアの極東政策の決定に大きな力を持ったベゾブラゾフ派(*the Bezobrazovtsy*)の政策や主張からは、彼らが、次のような主張をしていたことがわかる。(i)ロシアは北満洲から軍隊を撤退させて、むしろ遼東半島先端の旅順・大連に軍隊を送るべきである、(ii)日本の勢力圏と接する鴨緑江沿岸を開発すべきである、つまり、韓国に積極的に進出すべきである。
- ②1903年8月12日から開始された日露交渉において、満洲問題でロシア側に譲歩し、朝鮮問題だけを論ずる姿勢を日本側がとれば、それは対露宥和的なものとなり、交渉はまとまる、と日本側為政者が考えていた事実を、ロシア側研究とすり合わせてみる時、果たして日露交渉妥結の可能性はあったといえるのだろうか。ロシア側の極東政策形成に決定的な影響力を持ったベゾブラゾフ派こそが朝鮮を重視する勢力であったとすれば、妥協の可能性は低かったのではないか。
- ③朝鮮（韓国）を重視するベゾブラゾフ派の発想と、それに対して必ずしも自覚的ではなく、満洲問題で譲歩をすれば韓国問題は妥協できると考えていた日本側の発想のずれは大きかったと思われる。
- ④なぜ、韓国問題が後掲に退いたか→英米の支持の在りか。満洲の門戸開放なら支持獲得できる。

⑤ロシア自体、韓国問題、その安全保障上の問題が日本にとって死活的だと気づいていないはず

### (3) 戦史としての画期性

①1904年2月6日から1905年9月5日。局地戦ではない、前線とは別に銃後が出来る。前線の外に国内にもう一つの戦線ができる。

②陸海軍が協調して闘わざるをえない総力戦型の戦争。

これに同時代的に気づいていたのはロシア参謀本部アカデミー在学中に日露戦争が勃発し、志願して出征したスヴェーチン、1931年2月逮捕、満州事変勃発により釈放、1937年『最初の段階にある二〇世紀の戦略 1904年から1905年の陸海における戦争計画と作戦』上梓、その後逮捕、38年処刑。詳しくは、拙著『戦争の論理』「はじめに」の部分。～1870年の普仏戦争時代のモルトケ的な大陸軍事戦略とは異なる、独自の戦略を日本が創造していた点評価。～「日本の計画の核心は、異なるカテゴリーの軍、つまり陸軍と海軍を協調させることに向けられていた。この協調によって、何よりも、大陸戦略の基本をなす、軍の力の同時的利用という考えを拒否することになった」。旅順の攻防を、陸軍の要塞戦としてみるのではなく、陸海軍の共同作戦とみる。

③参謀本部、当初の計画になかった遼東半島南部攻撃＝旅順攻防戦などやりたくない。乃木希典の第三軍を陸軍が組織したのは、海軍の要請によるもの。第三軍は6月に遼東半島に上陸、8月に第一回総攻撃、第二回は9月から10月。第三回は11月26日から12月5日まで、同日、二〇三高地を奪取。

④第一艦隊参謀であった秋山真之は、この第三回総攻撃の間、乃木の第三軍のもとにいる海軍中佐・岩村団次郎に宛てた手紙を毎日書く。

乃木を督励。「二〇三高地は旅順の天王山と云ふよりは日露戦争の天王山」（1904年12月2日）

⑤こうした秋山の手紙は、極秘・部外秘の147冊『明治三十七八年海戦史』（1910年に編纂完了）には入っていた。しかし、普及版の4冊本『明治三十七八年海戦史』（1911年）にはなし。日本海海戦の敵前大回頭後の三〇分だけの砲撃でバルチック艦隊が撃破されたとの話になる。

## 5. 本日の史料

①一九〇三（明治三六）年一月二日付 山県有朋宛桂太郎書翰

拝呈仕候。爾後益御清榮御起居被為在奉大賀候。陳は寺内陸相昨日貴邸に参候御伝言之趣今朝巨細に拝承仕候。就ては直に罷出可申筈之処本日は無抛緊要之事件に而、明日は閣議、明後日は又々無抛、其翌日二十四午前之内に参候可仕候間、不悪御含置可被下候。（中略）小生は当日之御会合に於ては誠に快く諸事解決に至り候事と相考へ、其後小生左の順序を以て夫々運居候間、為念申上置候。

第一 満州問題は外交の手段を以て成し得丈け談判を試み結局此問題に而は最後の手段に迄は進行せざること。

第二 朝鮮問題に於ては我が修正の希望を充分陳述し、彼れ聞かざる時は最後の手段（即ち戦争を以ても）を貫くこと。

右二条の決定を以て進行するときは到底彼れにして我希望を入れされは結局戦争は難免候へ共、兎に角今一度は彼れに反省を求むる方可然との諸公并に我外交の意見其一定仕候と心得居申候。（後略）。『山県有朋関係文書』1巻、333頁所収

②一九〇三（明治三六）年一月二日付 桂太郎宛山県有朋書翰

芳翰敬読。過日十六日御会合之重要問題に付ては、老兄に於ても御承知之如く、老生は最早今日之時機にては満韓交換問題を提出するを以て得策となすの論を主張せしも、外相其他再考論を以て今一応是非相試むるとの事に相決したる次第に有之候。勿論略略は当局則責任者之駈引に出へきは当然なるを以て、此上は敢て主張すへき事に無之と外相に向て申置たる事に候。貴論之第二問題に付ては断然たる手段則戦争開始之論は、老生は承知不致様相覚申候。此段予め及開陳候。細縷讓拜青候。〔後略〕

(国立国会図書館憲政資料室所蔵)